

---

# 太陽が当たる場所

秋元愛羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

太陽があたる場所

### 【Nコード】

N60380

### 【作者名】

秋元愛羅

### 【あらすじ】

有無も言わずの天才が居た。だが彼女はどこか孤独だった。そんな彼女が高校進学して出会ったのは一人の少年。彼は、出会って10分後……………

## 序章

最近は暗い雲が覆っていたのに今日は珍しく空が青かった。

まるであの日みたいに。

「漸、今日は約束の日みたいだね」

まだ眠りこけている彼の頬をなでる。

私が触ってもピクリとも動かない彼はいつも深い眠りにっている。

病室のベッドで。

通い続けてもう4年。

私も私の周りもいろんな変わった。

そして大人の一步を踏み出し始めた。

だけど君だけは止まっただまま。

君だけは18歳の少年の姿。

あの日からずっと君を待っている。

今も昔も未来も。

ただ君に

「お帰り」

が言いたくて。

## 序章（後書き）

不良と私に出てくる悠理が主人公となっています。

桜が咲くこの季節にとんでもない新入生がやってきた。その噂は瞬く間に広がった。

帝楠学園中等部からの新入生。

彼女達はやがてこの学校を揺るがす存在となった。

「悠理、悠理ってば」

目の前には大きな桜の木がある。この木は学校が作られる前に在った木で作る際若い木だったこの木だけは残しておこうと言ったことで一本だけ変なところに在るのだ。

今ではこの学校の象徴ともなっている。

その木を見ていた時に声をかけたのは私の親友でもあり、従姉妹でもある佐々木優菜。

結構容姿も似ているし何故かユウって言う字を使っているから間違えられやすい。というか間違えられた。

まあそれはいいとしてもうそろそろ答えないと。

バッシン

「いつ」

「ぼーっとしない!!!」

たたかれる。

「痛い」

「悠理が悪い。ほら、行くよ。始まっちゃう」

「うん、分かった」

今日は部活動初日。昨日、届出を出したところだ。

今でも思い出されるあの学園を去っていったあの日。

「どうしてあんな無名の学校にしたの」

「あなたの實力ならスポーツ推薦で桜台高校にでもいけたのに」

「實力を捨てる行為だわ」

元仲間の言葉が今でも突き刺さる。

彼女達の関係は淡泊だった。

コートの中での偽りの仲間。

通常はただの他人。

なのに日本一に輝き続けてたのは個人個人の實力が高かったからだろう。

私は時田悠理。あの学校で天才と呼ばれた人の子供。そして彼女と同じように天才。



ただ私は・・・・・・・・天才と呼ばれることが嫌  
いだ。

「へえ、優菜はマネやるんだ？」

「うん。悠理は選手だけだね」

そっか、と言う面々。聞いた所同じバスケット部員になる予定の子達だ。

あまり人と関わりを持つことを控えている私にとってあの学校を出る決断をしたこと自体奇跡なのに優菜は他人と交流させたいらしい。

クラスの中で十分なんだが。

「バスケット部入部希望の人は付いてきて。勿論男子も」

女バス（女子バスケット部）の部員と思われる人が声をかけた。

それと同時に色んな人が中へと入っていく。

最後でいつか、なんて思っていると優菜につつかれた。

入ろうとしていた男子が私に気を使って待っていてくれていたらしい。

別によかったんだけど。

そんなこといったら彼の親切が無駄になるので言わないで置く。

「行こう」

優菜の言葉に込められた意味をしっかりと受け止めながら歩き出した。

それから先輩に言われたところで事前に言われていた体操服に着替え、バスケットシューズを履き替る。

真新しいバスケットシューズでキュッキュと足をこすらす。

いい音。

この音に何度落ち着かせられただろうか。数え切れないほどの記憶が蘇る。

そしてそのたびに私は何を思ってきたのだろうか。

あの場所で見つめていたものは何もなかった。

私にあったのは“彼女”を超えることだけ。

「新人生集合」

さっきの先輩のところへ向かう。

もしかしてこの人はキャプテンなのかな？

その声にみんなが集まる。

どうせ自己紹介だろうな、そう安易に思っていたらいきなりゼッケンを渡された。

あれ？なんでゼッケンが来るの？

「初心者とマネージャー以外はゼッケンを着て。

今から毎年恒例の行事、同じ新人生の男子と試合をしてもらってから」

「え〜〜〜！！」

自己紹介なしでいきなり試合？！

「じゃあ、ガードの人は手を上げて」

驚いている間にチーム分けが始まった。

ありえない。いや、もしかしたら高校特有とか違う学校だから？

だけど周りの反応も私と同じようだ。先輩達は笑ってるけど。

そう思っている間に分けられていた。

そして簡単に分けられたチームでの自己紹介が始まった。

透、海、美咲、紹香。美咲と海は同じクラスの子だ。

話すと意外に馬が合いそうで話を聞いていて面白い。なんだか個性的な面々だ。

うん、なんとかやっていけそうだ。

パンパン

手の鳴る方を向いた。

ホワイトボードに何か書いてある。よく見るとA・B・C・Dと下に書いている。対戦相手が決まった感じだ。

「今から10分間、試合をしてもらうから」

それを聞いてなんかワクワクしてきた。

何ヶ月ぶりだろうか、試合をするのは。

簡易試合でもひさしぶりだ。

その時だった。

「えゝ女子とやるんですか？経験者っていつてもつまんなくないですか」

1人の男子が叫んだ。

みんな、彼の方を向いている。

黒髪で綺麗な顔立ちをしてる。

なんか要ちゃんが好きそうなさわやかな感じを受ける人。

後で隠し撮りして要ちゃんに送りつけようかな。

まあそんなことは後にしてなんとなく雰囲気が悪くなるのを避けた  
いのだが無理そうだ。

と言うか堂々といえる彼は度胸があるというか、怖いもの知らずか。

案の定・・・・・・・・

「何あいつ。女子だからっていう理由でつまんないとかひどい」

その言葉に相づちを打つように思い思いのことを言っている。

でも彼は気にした様子はない。

確かに言いすぎかなと心の中で女子に同情する。

私も女子だけだね。

新人生の中で勃発しそうなことを気にせず、というか見ない振りを



して先輩は笛を鳴らした。

それと同時にさっきの男子も並ぶ。

私たちと対戦する相手の一人だったのか。

「頑張つてー」

「あんなやつに負けるなー」

みなあの言葉にイラッと来ているのか応援が激しい。

まあいいか。

私は楽しむだけだから。新しいバスケットを。

私は目の前のコートに走り出した。

「お願いします」

こうして試合は始まった。

そして試合が始まって気づいた“盲点”

それは私たちにはチームワークがない。

当たり前だけど動きがバラバラでパスが上手く機能していない。

かろうじて点差がないのは相手のシュートミスと私や透達のスリーシュートが入っているためだ。

「つまんない」

その言葉を撤回しないといけない。

今、本気で楽しい。

特にユーリ、と呼ばれていた無愛想だった子。

スリーを外していないことも凄いけどあの軽やかな動き、それを可能にする判断力。

男だったらこの子と組めたのに。そう思う。

まあそれは彼女に失礼か。

それとあの笑顔。

初めはクールで無愛想だと思ってた。俺の挑発にも冷静に対応してたし。

でもバスケットをやり始めた瞬間笑っていった。

特にシュートが決まったときの嬉しそうな笑顔。

その顔は可愛くて今まで見てきた笑顔の中で一番最高で俺のタイプそのものの笑顔だった。

俺はあの笑顔が欲しい。自分の物にしたい。いや、彼女自身がほしい。

彼女を見るたび、ぞくりとするほど湧き出てくる感情。

こんな気持ち初めてだ。

コレが女子がよく騒いでいる“恋”

しかも一目ぼれと言っちゃつか・・・

俺には無縁の世界だと思ってたのにな。

彼女のプレイを見ながらどうやって彼女を手に入れようか考えていた。

「ジャンプボール」

美咲がジャンプボールを取った。

なんとかこれで並んだ。ほっとする。

だけどこれで点差が埋まっただけで気がぬけてらんない。

ブザービーターされて逆転、なんてありえる。

最後の一秒まで何が起こるかわからないのがこのスポーツの面白いところなんだけれど。

「なあ。俺、今からお前につくから」

前触れもなく急に声をかけたのは女子を罵って現在ブーイングされているあの彼だった。

「・・・何でそんなこと」

普通、そんなこと言わないのに・・・

その前に状況によって変わるのに。

なんで？

そんな疑問に答えるはずもなく続ける。

「だからスリーはするな」

「あの、何がしたいの？」

「タイムマン」

1オール1のことかな？

（一対一ですること。この場合彼はディフェンス、彼女はオフENSEになって戦いたいということ）

本当か？今のところこいつだけがシュートをしていない。

だからこそ信頼出来ない。

でも真剣な目付きだ。

「何が目的なの？」

「俺、真剣勝負でお前からボールを取りたい。」

この内容からすると私は気にいられたみたい。

ここで嫌がるのも手だけど私も試合中同じような事を思っていたのは事実。

「いいよ」

「ありがとう」

そう呟くと走っていつてしまった。

だがなかなか勝負の場はやってこなかった。

でもボールの音が響くたび、早くチャンスが来て欲しいと祈った。

そして・・・・・・・・ラスト45秒

「ユーリ、こっちへ」

「無理」

ちょうど1分切ったところやって来た彼女との勝負。

俺と隼人がパスをさせないようにしているから俺を抜かないとゴールには入れられない。

まあ、後ろにも居るみたいだから抜いた後出来るかどうかは分からないが。

ボン、ボン

持ち方が変わった!!

フロントをしながら止まった。

(左右の手を使いドリブルすること)

ということは俺を抜くつもりだ。



だがやることは一つ。

バックロールしかない！！

（片手でボールを持たないよう体の遠心力を使い回ること）

このやり方なら何回も止めたことがある。

右！

「漸、動くな」

！？

いつの間にも後ろに…

シュッ

シュートする音がする。

そして

ボン、ボン

空しくボールが響き渡り・・・

ピー

「試合終了」

合図がなった。

俺は

「やつ、やったー」

負けた。

あの彼はまるで魂が抜けたように立っていた。

なんかちょっとかわいそうなことをしたかもしれない。

多分自信があつたと思うし。

「生きてますか？」

普通はそんな聞き方じゃないだろとか言わないで。

自分から話しかけるの苦手なんだから。

「生きてるよ。あの時何したんだ？」

あ、返してくれた。ってん？

「あの時っていつですか？」

「フロントして」

フロント？なんだっけ？いきなり専門用語言つなよ。

えっと。あ、ポンポン。

「右にボールを止めたあと

ビハインド・ザ・バック

（ボールを背中に通すこと）

して、左にバックロールをしただけだよ」

その言葉に驚いたのかまた固まった。

どこに驚いたのか聞いていいかなあ。

記憶の片隅にあった用語を使ったから自信ないんだけど。

「なあ、名前は？」

長い沈黙の後に返ってきた言葉はこれだった。

「時田悠理だけど」

「ユーリ、彼氏いる？」

「いないけど」

「へーそうなんだ」

・・・今更ながらさっきから何聞いてんだ？

さっきまで試合中のこと聞いてたのに。

それを疑わず答えちゃってる私も馬鹿だけど。

「じゃあ、ユーリ。俺と付き合って」

「・・・はあ？」

その瞬間、周りが止まって私達に視線が集まったのを感じた。

まず、何言ってたんだこの人。

だってコートのはぼ中心で会ってから10分ぐらいしか経っていない私に告白をした。

ときめく要素なんてくない？

まだ“すごいね”とか“男だったらよかったのに”とかなら分かるけど。

「ね、いいでしょ」

そう言うところについては事態をまだ把握していなくてパニックっている私

に対して理解できない行動に出た。

私を引き寄せて……

チュ

キスをした。

目と唇の感触を疑う。

コートの真ん中で告白した。まあここまでいい。

ただこいつはその後キスをした。

しかも私にとってはファーストキス。

考えられない。

一応こんな私でも乙女な部分があつて。

好きな人になりたいという思いはあつて。

要するに最低と言いたいわけで・・・

その後体育館にパチーンという音が響きそいつの頬に綺麗な赤い手形がついたの言うまでもないだろう。





最悪な事件が起きた。

まだ自業自得なら許せた。だが、これは違う。

人災だ。

私のせいじゃない。

あいつのせいだ。

あいつに向かって叫びたい。

「おまえなんか大っ嫌いだ

！！！！！」

次の日

私は英訳と戦っていた。

バスケしか目になかった私は勉強は出来なかった。

それは公立に入ったことさえ奇跡としか言えないほどの学力。

だから普通は宿題は昨日やっておくものだけど忘れた。

やり忘れたんじゃない。

思い出すとよみがえってくるあいつの感触を忘れたくて寝たらもう行く時間だったのだ。

「分かんない。

なんでもにはたくさんの意味があるわけ？

1つにしるよ」

乱雑に置かれた教科書、ノート、辞書。

今はそれと戦っている。

「って言われてもね。早くしないと先生が来ちゃうよ」

「うぐ」

半ベソになりながらもやり続ける。

今日は絶対に当たるのだ。

その時私の背中から力が加わってくる。

え？

ここの学校にはそんなことをしてくる親しい友達はまだいない。

まあもともと前の学校にもそんなに親しい友達なんていなかったが。

それはいいとしてまず、この学校に優菜“以外”私の中学の奴は誰もいないはず。

一体、誰？

「ここのt.oは不定詞だよ」

上から降ってきた言葉。

この声なんか聞いたことある・・・

嫌な感じはするがまずは確認することが先決だ。

ゆっくりと顔を確認する。

私の視線に気づいたのかにこりと笑うやつ。

忘れるわけないこいつはあのときの・・・

「あ~~~~~!!」

そこには会いたくなかったやつ。いや、部活に行けば絶対に会うんだけど。

「お久しぶり、ユーリ」

「帰れ！名前の知らない奴に呼ばれたくない」

「あ、そっか。まだ自己紹介してなかったね。」

1年8組、川岸漸。漸って呼んでね」

は、8組って…

「やっぱり特進組だったんだ。お久しぶり、漸」

さっき英訳を教えてくれていた友達が反応した。

「お久しぶり」

「あのさ英訳の邪魔なんだけど…」

実際問題本当のところ。

「あ、ごめん」

と、言いながらもどかない。

どという神経してんだよ、そう言いたくなる。

「もうそろそろ消えてくれないかな」

いや、すぐさま消えろ！！

あんたのせいで静かな高校生活が崩れかかってるじゃない。

昨日の時点で崩れてるけど。

「照れなくてもいいのに。恋人同士なんだし」

それ、爆弾発言ですから。

その言葉にクラスの視線が一点に集まった。

そのせいでさっきまで騒がしかったのが静かになったじゃん。

完全に注目の的。

ああ。もうだめだ・・・逃げられない。

隣にいる恵子も言葉を失っている。

私だって言葉を失いたいけどそれこそ危ない。

これは言っただもん勝ちだ。

「全否定してあげる。私はあんと恋人になった記憶はない」

「でも昨日キ」

すかさずこいつの口をふさいだ。

忘れたい過去なのにこいつは…

「まさかユーリ、“あの”漸とキスしたの？」

あのは気になるけど今はそこじゃない。

「してない、してない」

下手な作り笑いをする。

だけど肝心のあいつはいつの間にかいなくなって代わりに付き合っているという噂を残していった。

クラスの居心地は…悪い!! 悪すぎる。

それから授業が終わり今度は教室移動。

正確には質問攻めを回避してきたところだ。

「もう、やだ」

「どうした？英訳のところならちゃんと答えられたじゃない」

隣で今の今まで私をクラスメートに売った恵子が気にして言う。

「そうじゃなくてあいつのこと」

「ああ、漸のこと。別にいいじゃない付き合ってたって」

むしろ面白いし、と付け加える薄情な人間一人。

唯一私に話しかけてくれた友人第一号は楽しければよしの人間だったことに後悔する。

「よくない、ぼけえ！！」

確にかっこいいし、勉強もできるみたいだけど絶対にいや。



嫌なもんは嫌だ。

きらいななやつと付き合えるわけないじゃん。

そう簡単に許せるもんじゃないし。特にき、キスとか……

それじゃなくてもこれから嫌でも顔をあわせることになるのに。

ああ！！もう！！最悪」

完全に愚痴つてると急に視界が暗くなった。

「だーれだ」

聞き覚えのある声。ほっと安心する。

ん、あれその前にこんな子だっけ。

そう思いながらも答えを言う。

「優菜」

するとぐいっと引き寄せられる。

え、は？

「ユーリ、一時間ぶり〜」

「噂をすれば」

そこ感心しないの。

抱きついてきたやつを必死で食い止める。

この際格好とかは気にしない方向で。

「優菜、なんでこいつも一緒なわけ？」

「何となくかな」

苦笑いをし困った顔をしている。

この顔は優菜が連れて来たわけではないらしい。ただ、ついてきただけ。

いや、優菜の性格上そんな事はしないか。

「ユーリ、暇なんだけど」

「知るか。どうせ授業中寝てんでしょ」

「ユーリ、一応言っておくけど漸は首席だよ」

「・・・」

一瞬にして力が抜けた。

こいつが首席？本当ですか？優菜さん。

こんな、こんなやつが首席。ありえない。

ずっと優菜が主席だと思ってた。

そして優菜を超えたのがこいつ？

「お、尊敬してる？ユーリ可愛い」

ポーンとたちつくす私の頭を撫でてきた。

いや、意外に優菜より頭いいことにびっくりしてるだけでって思ってる場合じゃない。

「違う。大体あんたの事、私は知らないしあんたも私の事知らないでしょ。」

「つか触るな」

これで納得しろ。

そいつは考え込んだあとにこりと笑った。

「大丈夫。」

今分からなくても3年もあれば分かるでしょ」

それも当然のごとく。

それから丁度いいタイミングなのか予鈴のチャイムが鳴った。

「じゃあね、ユーリ」

手を振りながらクラスに戻っていくあいつ。

めちゃくちゃムカつくんですけど。

シュ

カランカラン

ドン、ドン

ドリブルシュートの練習中

「ユーリ、ごめん。変なところにいった」

「別にいいよ。気にしないで」

心の方は揺れても体の方は大丈夫…か。

当たり前か。

見放されてからずっとこんな感じだったから。

練習以外関わらない、話さない。

試合に支障が出るようなことはしない、させない。

でも何でだろう。何も変わってはないのに。

心はもやもやする。

原因は分かっているけど効き目ないし。

情け無い。

あれから変わろうと決意したのに動けない自分が憎い。

「ユーリ」

ぎゅっと後ろから抱きしめられた。

本日五回目。

「ため息すると幸せが逃げてくぞ」

超ニコニコしているこいつの顔を見てイラつときた。

こっちはあんたのせいで悩んでるって言うのに。

デリカシーって言うもんがないのかこいつの頭ん中には。

「ウザイ。大体さあ、私のことからかってるでしょ」

「からかってない。本当に好きだもん」

もんって子供か！

「冗談言わないで。それと勝手にくつついたりしないで」

恋人でもなんでもないんだから。

それし変な噂とか立ったりしたら嫌だし、そういうの迷惑だから」

そう言うときあいつに背を向けて歩いた。

歩いていたら優菜が近付いて来た。

「悠理、言い分は分かるけどちょっときつすぎ」

優菜が怒っているのは分かってる。

でも私には関係ない。

こづいづのははっきりさせたほうがいいと思う。

「悠理、漸は…」

「あいつの話はしないで」

そう怒鳴って歩き続けた。



怒鳴ってから3日が経った。

あいつはあまり、というか一切近づくなくなった。

人の噂も七十五日と言っけれどそれよりも早くクラスのほうの熱はすぐに冷めた。

なぜだろうか。

そして何故あいつに言い過ぎたと思う自分がいるのだろうか………  
……？

昔はそんなことがなかったのに。

人に言いたいことははっきりと言う。

それが私の信念だったから言いたいことを言っても何も思わなかったのに。

カラン、カラン

「珍しいな。優菜ちゃんがこんな時間に来るなんて」

「悠理は上ですか？」

「ああ。帰ってきてから元気ないんだよ」

「そっか…ありがとうございます、おじさん」

ドン、ドン

階段から足音が聞こえる。

お父さん？

それとみにーに？

でも音のリズムが違う。誰だろう？

トントン

扉を叩く音がする。

「悠理起きてる？」

「優菜！なんでこんな時間に」

なんでいるの？

「気になったの。なんとなく」

ああ・・・やっぱり私のこと気になってたんだね。

昔からこういうことは優菜に話してたっけ。

懐かしいな。

私たちが血が繋がっていることが知らなかったの時から相談事は  
ずっとしてた気がする。

いつもは私が乗るほうだったから。

「優菜・・・」

「どうしたの？」

「私、やっぱりダメだね。」

本当に伝えたいことは伝えられなくて。

感情のコントロールもできなくて気づいたらそのまま突っ走ってる。

あの時と変わってないよ」

変わりたいと願っている自分がいるのに変わらない自分が嫌い。

一層のこと私なんか消えてしまえばいいのに…

そのぐらい自分が嫌い。

「悠理……」

あのね悠理、今日の話なんだけど。

ある子がね悠理のこと根も葉もない噂をしてた子達にこう言ったの。

悠理のことよく知らないくせに悪い風にいうなってね。

誰だと思っ?」

考える。

でも見当がつかない。

まずそんな事が言える友達はいないはず。

「誰?」

「漸だよ。」

私、あの試合の次の日漸に怒ったの。私も8組だし席が近いから。

ユーリを遊ばないでって。

そしたら真剣な顔をして本気で悠理のこと好きだよって言ったのよ」

本気で…好き？

まさか。

「ユーリ、もし素直な気持ちを伝えたいなら明日一緒に学校に行かない？」

「な、なんで」

私の言葉を聞かず

ドンドンドン

と行ってしまった。

優菜から漸の事を聞いた。

たった10分で告白し私のファーストキスを勝手に奪ったやつだし堂々と爆弾発言ばかり言うやつだし言いたいこともたくさんあるけど。

でもやっぱり私は・・・

チャリン、チャリン

短くしたスカートにシュシュで2つしばりにした優菜が来た。

なんでこんな早い時間に。

いや、その前に目をつけられる格好だよ。いいよね、頭いい人は。

私なんか何もしていないのに目つけられてるんだから。

「おはよ、悠理」

「おはよう、優菜」

自転車から降ると一緒に歩き始めた。

去年では考えられない光景だ。

去年の私たちは仲間という名だけの檻に入れられた絆もないただの  
選手の集まりのようなものだったから。

歩いて20分。いつもよりも早い時間に校門に着いた。

どこから卓球のピンポンの音やら野球のバットにボールが当たる音がする。

でもその中に微かだが聞きなれた音がする。

どうして？

だってバスケ部は朝練なんてないはずなのに・・・

「な、なんで」

「実は体育館で朝練しているのは演劇部だけなの。

コートの方は使っていないから自主練していいんだけどほとんどの人が知らなくて使っていない訳」

「へ」

そうだったんだ。初めて知った。

「それじゃあ参りましょうか」

「ど、どこに？」



「漸の所に」

優菜に強引に連れていかれた。

強引はいつものことだけど、出来れば自転車を置いてからと言って  
も聞かないから意味ないか。

はあ。心の準備ができてなんですけど。

それでも体育館に着く。

そして体育館には一人の男子がいた。

優菜はかまわず扉を開ける。

彼はそれに気づいたみたいでこちらの方にやって来た。

彼は誰も来ないと思っていたのか、それとも私たちがここにいるか  
らかなり驚いている。

それは当たり前のことかもしれない。

「漸、おはよう」

「お、おはよう」

こいつの視線はこっちに向けられているが合わせたくないの顔で顔をそむけ右だったり、左だったりと不自然に目をそらしてしまう。

「ユーリがね言いたいことがあるって。

私、付いて来ただけだし自転車を校門の前に置いたままだからあとでね」

え？

「ま、待つて。ちょっと待つてよ」

呆然と去っていく優菜の後姿を見送る。

そのために自転車を置いて来たのか。

優菜にやられた…？つか見捨てられた。

「言いたいことって何？」

いつの間にか私の目の前にいた。

いきなりですか？

前置きとかさせてよね。

「あ、あ、あのさ、その…」じめん、なさい」

頭を下げた。

「え？」

「あの… なんと言うか・・・

言いすぎた？ そうじゃなくて別の言い方があったといつかと、とにかくごめんなさい」

私はもう一度頭を下げた。さっきより深く。

「ユーリ、顔を上げて」

言われた通りにすると突然強い力で抱きしめてきた。

突然のことだし背中をもっていないと体勢が崩れてしまつぐらい強く抱きしめられてて体が反っている。

な、なんで？

なんでこんなことが起きてるの？

まず何で抱きしめるの？



どう反応すればいいのか分からない私は無意識に体を縮めていた。  
するといきなり目を合わせてきた。

か、顔が近い。

「可愛い。めっちゃ可愛い。」

どうすればいいんだろうっていつときのユーリ、すっごく可愛い」

そっというと頬にキスをした。

は...？

え、話が食い違ってる？

というか何してるのドサクサにまぎれて。

「話の内容分かる？」

「うん。3日前のことでしょ。」

あれで分かるんだ...ってちょっと待って。

「怒ってないの？」

結構言い過ぎたから」

私でも結構言い過ぎたって思ってるし。

「全然。中学の時しょっちゅう言われてたし」

「じゃあ、なんで3日間も近づかなかったの？」

「ん〜とね。」

1日目は友達の前宿題を手伝って2日目は反省文の手伝いで3日目は教室掃除の手伝いかな」

近づかなかったのではなく近づけなかったのか。

呆れた。

「もしかして3日間会えなくて寂しかった？」

「誰が！気になったただけだから」

そう言うとおもいきり突き飛ばした。

それでも男の力には勝てなくて。

「ユーリ可愛い」

「可愛いくない！」

ムカつく。

やっぱりこいつ私の見た中で一番の変人。

初めて見た素顔。

ユーリが無表情、無感情になったのは私を含め、あの場所にいたバスケ部員達。

あの頃の私達はユーリを尊敬しそして憎んだ。

分かる？

どんなに練習してうまくなったと思ってもすぐに抜かされてしまう気持ちだ。

たくさんいる部員で争っているレギュラー枠を何気ない顔で見られる気持ちだ。

特に上の先輩たちはものすごかった。

だがそのせいでユーリは感情を捨てコートに立ち続けた。

だから漸のあの行動は今後のユーリに影響が出ると思った。

でも、もう大丈夫。

漸と関わることでユーリは変わってく。

ほらもう変わってる。

もしかしたら漸がユーリを失った感情を取り戻してくれるかもしれない。

そして新しい感情も芽生えてくるかもしれない。

それは漸しただけど。

「優菜！ーお願い、こいつをはがして」

「ユーリ、こいつは止めない？」

「一応、名前はあるから」

「え……」

こいつに味方するの？

「ね。いいよね」



追い打ちするように言う。

優菜まで言われると…

「うん…か、川岸」

「ユーリ、大好き。愛してる」

「くつつくな」

私の言葉を聞いて優菜は笑いだす。

「どうかした？」

「あ、いやなんでもない」

そついうと漸に近づいた。

「漸、この子、全然素直じゃないけどよろしくね」

え？何、今の…その“よろしくね”の意味。

まさか私売られた…？

「おう。任せといて」

呆然と立ち尽くす私の隣には張り切っているあいつがいた。

時田悠理、15歳。

初めて従兄弟であり信頼している人に売り飛ばされました。

しかも相手はわけ分からない変人。

これから先、どうなるんでしょうか・・・

6月。

梅雨に入ったので超蒸し暑い。

じめじめしてて気持ち悪いし、おかげでイライラはMAXなんだけど…

「悠理、おはよう」

朝から後ろから抱きついてきたやつ一名。川岸だ。

慣れてきたけど毎回、毎回…

「毎回言ってるけど抱きついてくるのやめない？」

「えー」

不服そうに私を見ている。

こっちは蒸し暑くてイラついてるのに。

だが私の思いとは裏腹に顔を近づけてきた。

き、危険！

そう思い私は川岸の体を押した。

だけど私の行動は見破られていたみたいでうまくかわされて抱き合う形になる。

「今日さあ、カンドンが1時間目だからダルインだけど」

「はいはい。分かった、分かった」

力いっぱい放そうとするがそれでも離れない。

毎日、毎日、暇さえあれば私の所に来るおかげでなぜか私のクラスに溶け込み教室にいてもバレないほど。

また正式交際者として先生達に認められた。

それから周りには知らない人はいないほど周知の事実になった。

だからこうして抱きしめられても誰も文句は言わないし冷やかされもしない。

出来れば文句でも何でもいいからを言っただけだった…

そのおかげでこんな状態でも誰も注意はしない。

だからと言って悪いことばかりが起きた訳ではない。

漸のDF（パスやシュートを妨げる役割）は、とても上手く教えて貰っていることもしばしばある。

それ以上にくつついてくるけど。

でも物の使い道ということだ。

．．．．．なんか言葉の使い方が違う気がするのは気のせいだ。

部活中

ドン、ドン

「はい！」

2対1の練習中  
(オフェンス2人とディフェンス1人)

男子と一緒にだから意外に面白い。

「とつた！」

シュツ。

珍しい、川岸とやるのか。

相手は…出雲先輩。

センターラインを踏んだ途端にDFに入った。

動きが早い。

さすが、川岸の元中の先輩。

ためらってたら叩かれる。

フェイクで川岸に通ったパス。

川岸の目からやりたいとサインが出てる。

はいはい、やっていいよ。

そう思いながら受け流す。これはokという意味。

それを見た川岸は嬉しそうにスリーシュートを放つ。

ずっといつしよにいるせいでいきなり俗に言う愛の告白を唐突に言う、TPOを考えないで抱きしめる等の行為を受け流せる技術とか関係ないものまで身についてきたような気がするのには気のせいかな・  
・・・・

そう思っていながらボールの軌道を見て、ああ今日も届かなかったようだ と判断し走り、出雲先輩の前に落ちようとするボールをジャンプして入れる。

だが体勢が・・・崩れる！！

その時、何かが当たりゆっくり足が地面に着いた。

「ナイシュ、ユーリ」

「ありがとう」

正直にお礼を言う。

もし受け止めてくれなかったら捻挫どころではなかった。

だけど……………

「そこ！…！いちゃつくの後」

「はい」

いちゃついてないつつの。

そう思いながらコートの外へ出る。

キンコーンカーコン

「集合」

「はい」

部活が終わった。



最近早く終わるなあ。

そう思いながら片付けを手伝い私は急いで制服に着替え体育館を後にした。

「あれ？ユーリは？」

俺は悠理を探す。体育館には居ないようだ。

「先に帰ってったぞ」

いつも帰りは一緒に帰っている友達がやってくるとともに言った。

「えー。一緒に帰えろうと思ったのに」

今日こそはって思ってたのに。

最近慣れてきたみたいであたふたしなくなったからどうにかして俺に向けてくれるようにしないと。

あと名前呼ばせたい。

「それよりさ、漸。ちょっと寄り道しねえか？」

「いいけど…」

ニコニコ言ってくる友人の頼みを断るわけもいかないし、今日は母さんが早かったはず。

別に遅くたっていいよな。

「はい、決定！おゝい、透達もこねえか？」

「行くゝ」

それにしても悠理って徒歩圏内なのになんで早く帰ってんだろっ。

まあ夏になるからといって暗くないわけではないし。

でもいつも行きは優菜と一緒に来てるけど帰りは一緒に帰らないみたいだ。

「ただいまゝ。すぐ準備するから」

家に着くと目の前には好きな光景が広がる。

「急いでくれよ」

「はゝい」

私の家は自営業でレストランを経営している。

だからいつも店の手伝い。

本当は商業科に行ってから調理学校を行きたかったけど学力が…

「悠理ちゃん、ドリアン1つね」

「はい、酒屋のおじさん稚奈さん口説かないでね。おにいが部屋に籠もるから」

「分かってるよ」

あまり人は来ないけどお得意様がたまに来てくれるからしゃべって楽しい。

もつと多くの人に食べてもらいたいと思ってるけどいい方法が見つからない。

でもこれもいつかなって思う私もいる。

「最近、ユーリちゃん楽しそうだね。学校でいいことでもあったのかな」

「多分そうですよ」

カラン、カラン

「いらっしゃいませ。」

あら、初めてのお客さん？」

初めてのお客…？

珍しいなあ。誰だろう？

気になってひょいと顔を出した。

あれ？ものすごく見覚えある人達が……

「ユーリ、なんでここに」

やっぱり透たちだ。

と、いうことは奥に居る見たくもないあいつは……

「ユーリ、大好き!!」

やっぱり、こいつか。

稚奈姉と酒屋のおじさんが呆然としてるよ。

よく、人前で堂々と……

しかも川岸は知らないと思うけどここ、私の家なんだけど。

やめて欲しい。すつごく恥ずかしい。

「はいはい、離れてね」

気にしてない風を装って離れるように促す。

ここで反応したら可愛いやら何やら言われるのが目に見えてる。

だけどそんなことで離れるようなやつじゃなくて。

「やだ、このままがいい」

なんかハートマークが川岸の周りに浮上してるような…

今、そんな錯覚に陥ってるんですけど。

私の目が幻覚を見てるのかな…

それだったら早めに眼科医行かないとなっただけでる前に。

カラン、カラン

「あれ？みんな…あんたら何やってんの。

ユーリ、仕事サボると起こられるよ」

「どこがだ！川岸が抱きついてきてとれない状態なのんきに行っている優菜に喝を入れる。

「あ、その子が優菜の言ってた川岸漸君ね。

はじめまして。時田稚奈です」

「はじめまして。川岸漸です」

あいつは私から離れて稚奈さんと仲良く話している。

動けるようになったけどなんかムカつく。

そんな様子に一人笑っているやつが居るとも知らず川岸と稚奈さんの姿を見ていた。

「ねえ、なんで働いてるの？」

気になってたのか透は聞いてきた。

ああ、帝楠出身で言うこと知ってるんだっけ。

「え？あ、ここ、私の家」

「…えゝ!!」

驚かれてもなあ…本当に私の家だし。

「じゃあどうして帝楠にいたの？」

「特待生制度？」

「そんなんじゃないくて…なんか決められてたっていうか…」

「そんなんだ」

実際は優菜のお母さんのおかげだけど。そんなこといったら怒られるからやめておこう。



稚奈さんと話終わった川岸が来た。

それと同時にキッチンの方から足音がする。

ヤバイ、お父さんだ！

こいつがこっちに来るってことは絶対くっついてくるに違いない。

こいつとくっついてる所を見られたらおしまいだ。

くっついてくるあいつから逃げようとしたその時肩をつかまれた。

まさかこいつ…私は悪夢を思い出す。

思い出したく無かった。いや、思い出す気もなかった。記憶が鮮明に蘇る。

唇の感触も

甘い吐息も

身体の温かさも

あの時と全てが同じ。

ただ違っている所は

今はコートの真ん中ではないこと

やがてあいつの顔が離れていく。

こいつの思考回路が分かんない。

いったいこの首席は何を考えているんだろう？

それとも誰でも分かるが私だけ分かっていないだけなのか？

どちらにしろこいつは私の家族にたいする境地が危うい。

特に大黒柱に見られた以上は。

それは私にとっていいことなのだがちょっとは心配しておこう。

「君、悠理の彼氏かい？」

そう言ってお父さんはあいつに近寄った。

「はい！川岸漸といいます」

気合十分で答える川岸。

だけどそれどころではない。喧嘩<sup>けんか</sup>とはいやなんだけど。

そう思いながら見守る。

ん？待てよ。

うちのお父さんの性格を一から考えてみると・・・

「漸<sup>しん</sup>…君でいいよね。

漸君、悠理のこと頼んだよ」

やっぱり~~~~~~~~

うちの家、こういうこと（恋愛<sup>恋愛</sup>ごと）に関しては前端的にOKするんだった。

お父さんいわく

『本人たちがそうしたいならそうさせないと』

らしい。

それはいいとしてなぜ、そこ頼むなの？

なんか結婚・・・

言つの恥ずかしくなってきたからやめよう。

「昔から海理に似ていじっぱりで素直では無かったから心配してたけど」

漸の手を取り力を入れた。

「悠理を頼む」

「はい！悠理を幸せにします」

お父さんの、お父さんの馬鹿！！

なんでそんなやつを認めるの！

その前にまだ私ら未成年だぞ！

ちょっとは反対しろ～～～～

と言うかお母さんが意地っ張りとかそういうのではなくてあなたがしつこい位迫ったからでしょうが！！

そこ、何年前から説明してるんだから分かって。

そして川岸！！

私はあんに幸せにして貰う気なんてさらさらないぞ。

というかいつから私たち付き合っていることになってるの？！

だがそんな思いもむなくお父さんと川岸は仲良く喋っていた。

「生きてるか？」

低い声がしたのと同時に頭を叩かれた。

憎まれ口はいつものことだけれどちゃんとやさしさがあることは知っている。

だけどそれを見た川岸は何にムツとしたのか分からないが

「ユーリ、おいで」

と無意味にくつついてきた。

私はそれを抵抗しながら振り返る。

「お兄達お帰り」

「お帰りなさい」

稚奈さんは嬉しそうだ。

「あのさ、悠の彼氏。本当にこいつでいいのか？」

暴言、暴力は日常茶飯事、そのくせ馬鹿だし。

一緒にいたってつまらんぞ」

ナイス、にーにいい！

内容はむかつくけど考え直すチャンスくれたには違いない。

「へ？そうですか？

可愛いし、バスケ強いし。

もともと俺のタイプなんで。ね？ユーリ」

その言葉を聞いた瞬間にーには笑い出した。

「あゝ悪りい」

笑いをこらえているがまだ笑ってるし。こいつ！！！

「悠が可愛いね」

と小声を聞いた時はさすがに恥ずかしくなった。

私そこまでかわいくないし。去年までは男子に見られてたし。

それが少しコンプレックスだったりする。

「ゴメンユーリ、もうそろそろ…」

透達が遠慮がちに言う。

そうだ、さっきからドタバタしてて忘れてた。

しかも肝心の料理食べてもらってないし。

「あ、また明日ね」

「うん。今度来てね」

「じゃあね」

そういうと扉がしまっていく。

また明日ねっか。初めて言われたな。

そんな気がした。

「俺も帰らないと。ユーリ、また明日ね」

ぎゅっと抱きしめて名残惜しそうに離れていく川岸。

そんな顔をしないでよ。

最近、そういう顔を見ると弱い。



母性本能っていうやつなのかよく分かんないけど。

だからなのかイヤって言えなくなってくるじゃん。

実際言わなくなってるから。そんな自分がおかしくって目を逸らした。

「ユーリ、そういう顔すると襲いたくなる」

そういうとグイツと抱きしめいろんなところにキスを落としてくる。

さっきの言葉、却下。

一時的な情に流された私と好き放題やってるこいつが今、最大の敵だ！！！

「さっさと帰れ！！」

一発思いつきり殴ってそのまま川岸を外に追い出した。

ふう、やっと出ていった。

額に付いた汗をぬぐう様な格好をした。

「お前に彼氏がなあ」

思い出し笑いをしながら話しかけるにーにい。

そんなに笑うことか？

ムスツとした顔で言う。

「見るからに嫌がってたでしょ」

「そうかな？さっきの悠…」

「何？お兄」

なんかよくないことを言いそうなお兄を睨み付けた。

「あ、いや何でもない」

ただど何を言おうとしてたんだろう？

自分から言わせないようにしたがやっぱり気になった。

誰もいない扉を見ていた。

彼と会ってから見てきて分かったこと。

川岸漸はムードメーカーでどこにいてもみんなの中心にいる存在。

誰でもしゃべれるそんな彼が羨ましい。

興味なさそうにしてる私に差し伸べた手を伸ばしたのはやっぱり彼だった。

その反面何故、彼なんだろうと思ってしまっ。

私が望んでいるものを持っているそんな彼が羨ましい。

これがあの人達の気持ちなのだろうか――？

夏の大会が終わり三年生の夏は終わった。

一年生は出れないため私たちは応援だった。

結果は初戦敗退だったがいよいよ試合だったと思う。

それから二年生を中心とした新メンバーとして男女ともに練習を開始してまもなくのこと。

いつもと変わらないある日の練習のときだった。

「集合」

「はい」

前触れもなく急に集まった。

いきなり試合でもするのかなと思っていた。

そして・・・

「え」と。3年生がいなくなり1週間が経つ。

秋からの試合は夏、どれだけ成長したかで変わってくる。

なのでチームワークの強化と個人の實力向上に向け合宿を行う」

合宿か・・・遅くまで練習出来る。

一応近くにバスケットゴールはあるけど電気が少ないせいでやりづらい。

でも体育館なら広いし全体的に明るくて普段の練習と変わらないし。

「だが、合宿は練習するために遊ぶ為にやるのではないからな」

ちらつと私の方を見た。

ああ、そういうことですか。分かりました。

いちゃいちゃするなって言いたいんですよ。

言っちゃ悪いがいちゃいちゃしてないし。

楽しみ半分、不安半分を抱えて合宿当日。

学校の近くにこんな所があったんだな。

そう思って見てるのは裏庭側にある中学のとき修学旅行で行った  
民宿ぐらいの大きさもある建物だった。

歩いて3分もかからないが裏にあるからか茂み隠れて見にくいから  
なのか1年生は誰も知らなかった。

話によると学校の先生でも知らない人もいるんだとか。

その前に何でそんなところに建てる必要性があったんだろう？

そして最初にやりはじめたのが・・・

「ユーリ、布団運ぶの手伝って」

「うん、今行く」

掃除。

最近使ったのはゴールドンウィークと言ってたけどホコリ臭くて掃  
除中。

で、重い物を運ぶ主力となる男子はというと...

「わぁゝ水出た！」

「こっちに向けるんじゃないねえ」

こんな感じで遊んでいる。

はあ、今日は練習出来るのかな…

男子がやらないため一部、部屋が多いこともあるけど練習をしないでその日は終わった。

夜は誰もいないため自主練中…

ドンドンつと体育館に響いて昔を思い出す。

ただやけくそにゴールの目の前に立っていた幼い私。

それにちょっとしたでも触つとかなないと感覚が鈍るんだよな。

「ナイシュ」

「川岸・・・」

「電気付いてたから来たんだけど」

「偶然って言いたいんでしょ」

ニコリと笑う。

「当たり前〜ユーリ、分かってる」

絶対、嘘。さっきから人影があったことは知ってるから。

だけと言わないでおう。

「なんとなくだよ。練習やらない?」

「ユーリのお誘いならいつでもやるよ」

「なにそれ」

私は笑いながら走り出した。

こいつのことはまだ分からない。

何を考え何を思っているのか。

でも少しずつだけど透達のことを分かっていくことと同じようにゆ  
っくりでいいのかな?

そうしたらこいつの思考回路がちょっとでも分かることができるの  
かな・・・・・・?

そうじゃなければ今後の私の生活をこいつのせいで脅かされるのは  
もうごめんだ。

シュッ

ドン、ドン、ドン



「ふう〜疲れた〜」

「休憩〜」

ボタン

川岸は倒れこむように寝そべった。

私も川岸の横に座り込む。

「こんなに天井って大きかったんだな」

そんなことを言う川岸がおかしくて

「なにそれ」

つと、笑いかけると川岸が膨れて私を倒した。

「きゃあ」

でも川岸の腕のおかげで痛くない。

目を開けると見たことない世界が広がっていた。

初めて知った。

いつもいる体育館なのに。

「ね？」

「うん…」

感動しているところに体を寄せてきた。

「ユーリの匂いがする」

「変態」

ヘンタイ発言が出てきてむかついてそう言っただけで起き上がる。

慌てて川岸も起き上がりぎゅっと抱きしめてきた。

「ユーリのこと好きで変態じゃない!!」

その必死さに驚いた。

そこまでののか？なんとなく押され謝ることに。

「ごめん、言い過ぎた」

「許さない」

「ゆ、許してよ」

「じゃあ、許すかわりに代わりに…」

ニヤリとした。

「ユーリの中学のこと教えて」

「あ…一生許さなくていいよ」

教える必要性なんて全然ないからね。

むしろ必要ないと思う。

「え、酷いよ！ユーリ、お願い」

「いやだ」

ぐづっている川岸を無視しているとムツとしたのか抱きついたままの手の力を強めてきた。

なんかすっごく密着してるんですけど／＼／

そしてゆっくり顔が近づいてきて川岸の唇が耳元にあることが分かる。

微かに当たる吐息がこしょぐつたい。

それをごまかすかのように声をかける。

「川岸？」

「ユーリ、教えてよ」

一瞬で体温が上昇した。

そんなところで嘯かないでよ。

毎回これをされても全然慣れない私をからかっているのは分かる。

これに弱いこともこいつには分かっているはずだ。

なんかむかつく／＼／

「ユーリ、耳赤いよ」

くすくす笑いながら見るこいつが今さらではないが憎い。

「だ、だってあんたが嘯くから…」

だから心臓の鼓動が早くなってるんでしょ。

赤くなっている私の顔に満足して髪を撫でている。

最近こいつの言いなりになってないかな…

ちょっと心配するが気づいたら要求通りにしている私がいるのは確か。

結局かなわないんだよな、こいつには。

なんかしゃくに触るけど。

「あのさ川岸、うちの学校を理解するためには始めから話さないといけないから」

「どうして？」

「私立帝楠中だから……？」

「ああ、小学校から持ち上がりの……」

「いいよ、話して」

ゆっくりと息を吐いた。

この話を人にするのはたぶん初めてだ。

どうして話したいのかは分からないけど。

なんとなくだけど話さなければならぬような気がしたから。

「私の学校にはスポーツ強化プログラム、というものがあったの」

全ての始まりでもありスポーツを楽しめなくなった原因は代々続くこのシステムからだろう。

それによって私は得たものも失ったものもすべてが大きかった。

私は思い返すたびそう思っている。

だけどそれが間違っているというなら否定する。

間違っているのは・・・その目的を間違えたまま使用する私たち自身だ。

9年前、優菜のお母さんであり私の叔母が経営している帝楠学園初等部に入学した。

そこに待っていたのは厳しいトレーニングの日々だった。

身体能力で決められたスポーツで上達しなければ別のスポーツへ飛ばされる。

残りなければ他のものを蹴落とせ。一番でいる努力をしろ。

あの頃の私たちはそう教えられた。

だからなのかあそこには“楽しむ”という言葉がなかった。

私は身体能力値が高かったらしくすぐに上達し、4年生になる頃には6年生を抜かせるほど強くなっていった。

その頃からか、私の周りはいつの間にかどんどん変わっていった。

先生達の期待、他の選手達の羨望と嫉妬、そして…憎悪。

それらが重なり混ざり合った時私は孤独になった。

“天才”という枠組みに入れられて。

そして中学校に上がると同時に“パーフェクト5”そう呼ばれていた。

そこには私のようにあるスポーツで周りよりも優れている人達がい

た。

そして同じように自分の周りにある孤独を抱えて。

だからなのか痛みや苦しみが分かり合えた。

そして私達は完璧ではないと言い続けながらも期待に答えようとした。

いや、私達は知っていたかもしれない。

期待にこたえるために作られた私達の居場所だということを・・・

私は引退すると同時に家の近くにあること、東南高校へ優菜と受験しなんとか合格した。

バスケットではほとんど言っていないほどの無名の高校を選んだため先生にも先輩や後輩にも反対された。

もちろん私の、孤独に満ちた栄光を知る者も。

唯一すべてを知っていてなにも言わなかったのは“パーフェクト5”の人たちだった。

実際スポーツ推薦という手もあったし有名な高校のお誘いもきていた。

だけどそれはそれで私は嫌だった。

私にとって本当のバスケットは友達だから。



あの頃の私と比較してみてもこんなにも人に触れたのは初めてだった。今までの私はいつも無口でただ練習に参加すればいい、そんなことしか考えてなかったから。

あの先輩たちは言った。

『人は人と触れ合うことで変わる』と。

実際、先輩たちも変わった。

そして、私も変わっているのかもしれない。

こうして誰かに自分のことを話しているのだから。

「ユーリ、ここに来て良かった？」

静かに聞いていた漸が喋りだした。

「うん」

いつの間にか離されていた手をまたギュッと力をいれ、抱きしめられた。

今日はなぜかあったかい。

「ユーリ、好きだよ」

「だから・・・」

漸の目は真剣だった。

こういう言葉だけは真剣に言ってるのは知ってるけど今日はもっと真剣だ。

目が、離せない。

「どうして私にかまうの？」

心の奥にいる疑問をぶつける。

だけどその答えは微笑みで消され漸はゆっくりと顔が近づけた。

その時の漸の目は何か愛しいそうに見つめていた。

初めて見せた表情に私はどうすればいいのかわからなかった。

いや、このときは分かりたくなかったのかもしれない。

心の奥に住む自分の存在を否定することしかできない自分によって。

ただゆっくりと近づいてくる漸。

あの時のような強引さはない。

だからなのかそれとも違う理由か私はいつもみたいに抵抗ができな

った。

ゆっくりと触る唇は優しく私の唇を包んでいく。

何もかも消し去ってしまいそうだった。

過去も悲しい感情もそして否定的な自分も。

その時、漸が一筋の涙を流していたことは誰も知らない。

夏休みが終わり秋大会の練習を……と言っわけにはいかなかった。

忘れていたのだ。

私にとって最大の敵を。

「宿題~~~~」

「相変わらずいつもの通り残っているわね」

宿題を忘れていた。

それはもう、すっからかんに。

一応小学校みたいに自由研究は無いからいいけど。

この量はちょっと……

「夏休みまでに終わらせるんだよ。」

終わったあとじゃ夏休みの宿題にならないんだから」

・・・とっても怖いです、優菜さん。

「3つ終わった!!」

一応ワークで数ページ（といっても数が多いけれど）は終わらせた。

後は一日一個の割合で終わらせればぎりぎり終わる!!

「こんにちわ!!」

・・・なんか久しぶりに聞く声がある。

目で優菜を捕らえると同じ事を考えているようだった。

なんか・・・嫌な予感しかないのはなぜだろう。

「悠理、優奈ちゃん、お友達がわざわざ来てるよ」

わざわざ来なくてもいい人だと思います!!

なんていえるわけでもなく、私たちはしぶしぶと言っていいほど降りる羽目になった。

うう・・・会いたくないよ。

「あ、悠理お久しぶり。優菜ちゃんも。

びっくりしたよ、あそこにいたら二人ともいないもん。

説得してようやくここに来たんだからね」

岸川とは違うさわやかさがあって、学校の規定により坊主なんだけれど、多分髪を伸ばして短髪になったらすぐにでもモテそうな容姿の……迷惑野郎。

「なんでここまで来た、蒼」

「蒼喜君も相変わらずだねえ」

中学の頃私の川岸的立場だった中井蒼喜。

変な補足をするとう菜以外ではじめてあった金持ちの息子だ。

そしてそっちもはじめてあった庶民の娘だったらしい。

それが今ではストーカーと化した。

「ん？用件。

悠理分かってると思ったのに」

「分かって、る？」

「去年の借り返してもらおうと思って。

踏み倒す気はないよね？」

・・・そういえば借りはあった。

去年私は宿題を手伝ってもらった。それと受験の勉強も手伝ってもらった。

それは借りとして返す条件だったけれど秋ごろからは忙しく全くもって忘れていた。

しかも終わりごろになってくるのか・・・

「え・・・まだ終わってないの？」

「・・・」

「そうなの。もちろん手は貸さないでね？」

優菜、何がしたいのかわかんないんだけど。

私を置いて結託し始めた二人。

なんだか・・・嵐の予感がするのは気のせいだろうか？





なんとなんとわざわざ来てもらって……宿題教えてもらってます。

ええ、貸しは増えましたが相変わらず頭のいい事です。

ぶっちゃけ学校の教え方よりも分かりやすいかも……

それで夕方までに二日分の宿題を終わらせた。

もちろん意味するものはある。

まさか結託した理由がこれだとは思わなかった……

「お泊り？優菜ちゃんじゃなくて、その子が？」

「うん、お家の人が約一週間ほど旅行しに行ってるんだって。

だけど部活で被ったから一人だけ行けなくて誰かの家に泊まるっていう感じになってお父さんが良いなら泊まらせてもいいかな？

優菜も泊まってくって言ってるから……」

「別に良いけど。龍季や龍星の服もあるからそれ着てくれれば良いし……ただ」

「ただ？」

「川岸君はいいのかい？」

「は？」

なんでそこに川岸の話が出てくるの？

「川岸君と付き合ってるんだろう？」

事情が事情とはいえはたから見たらそれは“浮気”に入るんじゃないか？

さすがに急とはいえ俺に言う前に川岸君に話したらどうだ」

「ごめん、川岸とは付き合ってない」

あれは川岸の勝手な行動だ。

今思い出すだけでも恥ずかしいのに……

「え？じゃあ中井君？」

「いや、違う……」

「もしかして二股？やめてくれよ龍季の二の舞は……」

「全く違う!!」

なんで、にみたいになるの?!

確かにあの人は普通に2人とか3人とか付き合ってるけれど断じて私はそんなことしない。

私は面倒ごとは好きじゃない。

それし好きな人は一人で十分!!好色とか絶対に嫌だ!!

「まあいいか。龍星も友達と旅行に行つて来てるし本来なら二人で寂しくいるところに来てもらってるから構わないよ」

「ありがとう」

まあそんな感じで許可が取れました。

それにしても彼に対して冷静というかテンションが低い。

どうしてだろう?

「はい、勝ちいゝ」

「ええ・・・」

「相変わらず大富豪弱いわね」

「顔に出やすいんだよ、悠理は」

「出てない！！褒められるほどポーカーフェイスだって言われたもん」

「それが出まくってるんだなあ〜」

「嘘だ！！」

絶対嘘だ。自信持って言えるもん。

「はいはい、二人とも静かに。もう遅いし早く寝ようよ。」

悠理と蒼喜君は一日デートでしょう？

ゆっくり寝たら？」

「そうだな」

「寝たくない・・・」

寝て起きたらこいつとデート・・・想像したくも無い。

絶対注目の的。

「寝ないとキスするぞ〜」

「・・・」

前例があるために寝ようか。

身の安全とこれ以上被害を受けないために。

こうして夜が更けていった・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6038o/>

---

太陽があたる場所

2011年9月1日09時50分発行